

〈 4. “Fogbound Society” 研究会 〉

4-1. Fogbound Society – 「生きづらさ」から社会を捉える

尾添 侑太

1 共同研究会の趣旨紹介

本研究会の名称に「Fogbound = 霧がたちこめた」という言葉を冠したのは、現代社会における些細な日常を生きるわれわれの様相——先の見えない暗闇の中で出口から射す一寸の光に向かうのではなく、視界が確保しにくくぼやけた光がさまざまに乱反射する状況の中で容易に身動きが取れない様子——を端的に表しているからである。

《普通に生きていける社会でどう「生」と向き合うことができるか》に答えることが本研究会の目的であるが、そこでキーワードとなるのが「生きづらさ」である。この「生きづらさ」という言葉で語られる多くは、しばしば社会問題——たとえば格差、貧困、フリーター、日雇い労働、リストラ、野宿者、いじめ、不登校、ひきこもり、自殺など——として論じられる。自分たちの生活や自分たちの生きている社会がどこに向かうのかという不安、社会全体を覆う閉塞感を常にどこかで感じざるをえない状況においては、できればそのような不安や閉塞感のないよりよい社会生活を営みたい——つまり、「生きづらさ」を極力排除すればよい——と考えるのは間違っているとは言えない。しかしながら、それと同時に人々が「普通」の生活のなかで抱える些細な問題や「語りにくい不安」は「問題にならない問題」として処理されてしまう。そのような弊害を乗り越えるため、本研究会では、双方に横たわる問題をより包括的な概念としての「生きづらさ」と捉え、「生きづらさ」を抱えながらもどう生きていくのかという視点に立とうとする。書評論文においても言及したことであるが、われわれが「生きづらさ」にもがいている中にしか現れ出ないような、生き生きとした「生」のリアリティを描き出すことがFogbound Society研究会の挑戦である。

2 過去の研究会について

研究会では、まず「自己論を再検討する」というテーマのもと、片桐雅隆氏の『自己の発見——社会学史のフロンティア』読書会を6月に開いた。11月には、塩飽耗規氏をお呼びし、筆者と2名での第1回目公開研究会を開催した。そこでは、関係としての「ケア」をテーマに、若手の精神分析者と社会学者による研究交流を行った。これまで交流の少なかった両領域の交叉から生まれてくる「対人関係と『生きづらさ』をめぐる現状と課題」について、非常に有益な討論が行われた。

3 各寄稿文の内容紹介と位置づけ

先述の筆者の書評論文も同様であるが、本パートにおける2名の各論考をつなぐものは「対人関係における生きづらさ」であろう。伊藤康貴氏は、ひきこもり当事者が直面する困難（社会と接する時点の困難、他者と接する時点での困難）を、個人の語りから明らかにする。そこには、社会や他者と接することに対する不安がたしかに存在し、またそれは対面的には出てこずうもれしてしまい、手記であるからようやくでてくるような問題という、いわば「いいえぬ」不安であるのだ。塩飽氏は、映画「ジョニーは戦場へ行った」を題材に、ケアする者とケアされる者という関係の圧倒的な断絶と理解の困難性を示している。この論考は、われわれがいかに社会的な身体を持ち、社会的な存在であるかをあらためて考えさせられるものである。外界との通信路をほぼすべて遮断された場合、何を伝え、受け取り、他者と何を分かち合うことができるのか。このことは、社会学領域のみでなく、精神分析との交叉から考えるによって、「生きづらさ」の問題として捉えることができる。

【参考文献】

片桐雅隆、2011、『自己の発見——社会学史のフロンティア』世界思想社。

片桐雅隆・榎村愛子他、2011、「<特集>『心理学化』社会における社会と心理」『社会学評論』61(4)。